

〔論 文〕

## 社会参加の当事者としての定住外国人 —地方に定住するフィリピン人のボランティアの意味の検討から—

Foreign residents as civic participants: the meaning of volunteering  
for Filipino residents in regional Japan

光 野 百 代

Mitsuno Momoyo

キーワード：地方に定住する外国人、ボランティア、市民的関与

### 要旨

地方に定住する外国人が運営するボランティア活動が、自らのコミュニティを形成するだけでなく、定住地の地域社会で認められ、受け入れられる過程において、当事者のボランティア活動に対する考えはどのように関与するのか。本稿は、進行中の質的調査から定住外国人がボランティア活動に付ける意味を検討し、社会参加の当事者としての定住外国人を市民的関与の議論に位置付ける。調査の対象は、地域及び近隣の県に住むフィリピン人と日本への移住を希望するフィリピンの若者への支援活動を行ってきたボランティア団体である。ボランティア活動は市民的関与（地域社会への政治的、社会的、道徳的な関心と働きかけ）を示す行動として位置づけられる。本稿は外国人の地域社会への参加を社会的形態（ボランティア活動）と政治的形態（アクティヴィズム）とに分け、ボランティア当事者の道徳的関心（活動を正当化する理由）が象徴する差異の出現を集団形成の事例として検討する。事例の検討から、外国人の雇用を進める日本の地域社会と連携した外国人団体のボランティア活動の複合的意義を本稿は探る。

### 1. はじめに

地方に定住する外国人が主体的に運営するボランティア活動が、自らのコミュニティを形成するだけでなく、定住先の地域社会で認められ、受け入れられる過程において、当事者のボランティア活動に対する考えはどのように関与するのか。本稿は進行中の質的調査から定住外国人による主体的な動きとして、対抗的な活動ではなく、ボランティア活動に注目し、その活動の意義を検討する。

市民的関与は、投票や寄付からスポーツチームへの参加、芸術的表現、困窮している人への支援活動まで、一般の人々が地域社会に政治的、社会的、道徳的な関心を持ち、その関心に対して働きかけを行うことを捉える概念である（Berger 2009）。その言葉は外国語（civic engagement）に由来し、特に、アメリカの政治参加の過程と構造的特徴を捉える

概念 (Skocpol 1999)、または、Putnam (2000) によって社会関係資本を促すもの全般を指す概念として用いられてきた (Ekman and Amnå 2012; Adler and Goggin 2005; Putnam 2000)。一方、国内においては、市民的関与の概念よりも、その概念が指す活動への参加者が特に検討されてきた (仁平 2003; 桜井 2018; 狭間 2013; 三谷 2012)。

市民的関与の概念は異なる性質の幅広い活動を指すため、概念の妥当性において問題点が指摘されてきた (Berger 2009)。一方、参加者に注目した国内の議論は、参加者の差異や参加の過程に注意を向け、参加の構造を捉える概念として市民的関与を検討する可能性を示唆する。つまり、市民的関与の概念が幅広い活動を捉える一方で、その議論では、ボランティア活動におけるミドルクラスなど、一定の参加者を想定して議論がなされてきたと考えられる。例えば国外の議論に目を向ければ、Robinson (2019) はアメリカの黒人による地域活動への参加が同国の民主主義に貢献してきたにもかかわらず、その議論は社会運動の動員論・アクティヴィズムの中に位置付けられ、黒人ボランティア団体の市民的関与からの検討が十分に行われてこなかったことを論じる (Robinson 2019)。

国内に定住する外国人の市民的関与の議論においては、労働組合運動 (高谷 2009) やアクティヴィズム (Shipper 2008) など政治的目的を持った活動分野において外国人の主体的な動きが検討されてきた。例えば、Shipper (2008) は外国人の団体が私的なコミュニティ形成に集中し、政治参加が限られている状況を批判的に論じる (Shipper 2008)。しかし、外国人による市民的関与が必ずしもリスクを伴った政治参加の形態をとるわけではない。地域社会への参加というレベルでは、草の根のボランティア活動を実践する外国人グループが形成されていることが報告されている (高畑 2010)。これらの議論は、社会の主流に属しないという位置付けで、外国人の対抗的な活動が注目されがちになり、彼らのボランティア活動については十分に検討されてこなかった状況を示唆する。

一方、高齢者の市民的関与については、政治参加よりもボランティア活動という社会参加の方が国内国外で注目されてきた。これは、心身の健康を自分で維持向上できる能力を持つ高齢者を理想とする高齢期モデルの考え方が影響すると考えられる。(Martinson and Minkler 2006; 秋山 2008)

つまり市民的関与の議論において、高齢期を迎える定住外国人というボランティア参加者は目立たない存在であるが (Torres and Serrat 2019)、それは偶然ではなく、市民的関与が一定の参加者を想定して議論されてきた結果として考えられる。本稿は、日本に定住し、高齢期を迎えようとしているフィリピン人が運営するボランティア団体について、当事者がボランティア活動に付ける意味を検討する。そして、そうした意味が象徴する他の集団との差異の出現をミドルクラスという集団形成の事例として検討し、外国人労働者の受け入れ制度を設けた現代日本における市民的関与の議論に外国人のボランティア活動を位置付ける。

## 2. 市民的関与とミドルクラスの形成

本稿が検討する事例は、同国出身者の支援活動を九州の地域社会で約25年に渡り行ってきたフィリピン人のボランティア団体 (以下、A団体) である。A団体の運営を担う8人の役員は全て女性で、その殆どが50代半ばの年齢にあり、日本で結婚し、20年以上日本で

暮らしてきた。4節と5節で後述するように、A団体の活動の特徴はフィリピン人と地域社会とをつなぐことを担ってきた点にある。A団体は地元のメディアや自治体で肯定的に紹介され、模範的な外国人団体として地域社会で信頼を得てきた。本稿は2つのコミュニティの橋渡しを担うA団体の役員がボランティア活動に付ける意味を検討することで、その関与の過程に注目する。そのために本稿は、市民的関与という概念を用いる。また、集団としてのA団体の特徴を捉えるために、本稿はミドルクラスの形成という過程を検討する。そこで本節では、市民的関与という概念、そして、ミドルクラスの形成という過程の本稿の議論での位置付けと、事例分析の枠組みについて述べる。

先ず、市民的関与の概念は複数の事を指す概念として批判的に論じられ、代わりに政治的関与（政治的結果を生むことを意図した関与）、社会的関与（つながりや信頼の生成につながる関与）、道徳的関与（前者2つの関与に関する道徳的な関心）の3種類の関与に分けて概念を包括的に捉える事が政治学の議論から提案されてきた（Berger 2009）。本稿はBerger（2009）が提案する関与の種類を採用する。しかし、事例を3種類に分類するのではなく、それぞれの種類で捉えきれない要素から事例の重要な特徴を捉える分析を行うことを目的とする。

一方、ボランティア活動の主な担い手としてはミドルクラスが存在が注目されてきた（藤村 1998; 稲葉 2016; Robinson 2019）。また、社会運動の議論では、ボランティア活動の主体が「同質的な世界で他者に対する想像力を失ったミドルクラス」（稲葉 2016、246）として批判的に捉えられてきた。これは、市民的関与の議論においてミドルクラスが肯定的にも、否定的にも意味が付けられる集団として理解されることを示唆する（Villegas 2019）。そこで、本稿はミドルクラスを職業や収入等の社会的地位や経済的状況の結果ではなく、価値や人とのつながりなど非物質的なものから象徴的に構築される集団として捉え（Villegas 2019; Lamont 1992）、その集団の形成に注目する。集団が参加の当事者によって想像される過程だけでなく、新しい参加者が市民的関与に参入する過程とその結果を考察することを可能にするからである（Villegas 2019）。

具体的には、本稿は市民的関与の概念を政治的形態（アクティヴィズム）と社会的形態（ボランティア活動）に分けた上で、当事者の道徳的関心を反映するボランティア活動の意味を考察する（Berger 2009; Villegas 2019）。さらに、草の根が制度化された関与かで関与の形態を捉えることで、関与の程度を検討する（Mercer 2002; Shipper 2012）。表1はA団体の事例を市民関与の議論に位置付ける本稿の分析枠組みを示す。さらに、表2はA団体の地域社会とフィリピン人コミュニティとの関係を表す。本稿は、A団体の役員がボランティア活動に付ける意味、そして、その意味を裏付ける役員の個人的な成長の経験を検討し、A団体の社会的関与の過程を表1の市民的関与の形態、及び表2に示すA団体の地域のコミュニティ関係での位置付けから考察する。

後述するようにA団体はフィリピン人というアイデンティティを共有する集団であると同時に、地域社会との連携から同国出身者への支援活動を展開してきた団体である。そして、その活動は地域社会における、外国人への行政サービスの提供などの分野においてフィリピン人との橋渡しの役割を担ってきた。しかし、A団体はフィリピン人コミュニティとの接点を持つ地域社会にとって便利な存在だけではない。2つのコミュニティを仲

介する立場にあるA団体を通して、フィリピン人と地域社会との連携がどのように具体化されるかを検討することで、A団体の地域社会への関与の過程を探ることができる。特に、最近のA団体の支援プロジェクトには、フィリピンの若者の日本での就職支援が含まれる。雇用者がフィリピン人を、フィリピンの若者が日本の就職先を選ぶことが前提となる中で、それぞれが相手に置く信頼は、それぞれを紹介するA団体に先ずは帰せられることになる。そこで、本稿は先ず同国出身者が結束する関係から成るA団体の道徳的関心に注目してその集団の特徴を捉える。そして、その関心が外国人の雇用という規制された分野での地域社会と協働した支援活動へと拡大する関与の過程を探る。

|          | 社会的形態の関与          | 政治的形態の関与 |
|----------|-------------------|----------|
| 草の根の関与   | 草の根ボランティア活動       | アクティビズム  |
| 制度化された関与 | 規制された分野でのボランティア活動 | 社会運動     |

表1 市民的関与の形態 Mercer2002、Berger2009、Shipper2012を基に著者作成

|                | 地域社会の内            | 地域社会の外         |
|----------------|-------------------|----------------|
| フィリピン人コミュニティの内 | A団体               | A団体が支援するフィリピン人 |
| フィリピン人コミュニティの外 | 地域の自治体、外郭団体、NPOなど |                |

表2 地域社会とフィリピン人コミュニティでのA団体位置付け 筆者作成

### 3. 調査方法

本稿の調査は、A団体の活動の観察、役員への面接、A団体のSNSページに投稿された写真とメッセージの分析から成る。著者は2018年7月にA団体のことを知り、その活動（タガログ語相談、交流イベント、等）の観察を約半年間行った。その後、観察から得た知見に基づき、A団体の役員7名（調査時）の内、5名に反構造化面接を行った。表3は面接の協力を得た5名の名前（仮名）、A団体での役割、役員になる年数を示す。

| 名前（仮名） | 役割 | 役員になる年数 |
|--------|----|---------|
| 田中さん   | 会長 | 25年     |
| 中島さん   | 役員 | 約10年    |
| 島本さん   | 役員 | 20年     |
| 本村さん   | 役員 | 約10年    |
| 村田さん   | 役員 | 約5年     |

表3 面接を行ったA団体役員の名前（仮名）、役割、役員年数 筆者作成



面接は表4に示す質問を中心に役員のボランティアの経験について1時間～3時間程度の聞き取りを行った。面接の質問は英語と日本語で行い、その後の回答は日本語で行われたが、英語が用いられる場面もあった。面接の内容は録音、または著者がメモを取って記録された。録音された内容は著者が文字起こしを行った。また、面接は著者とA団体の役員がお互いに相手のことを良く知らない時点で行われ、著者はフィリピンについての知識も殆どなかった。この調査の過程を考慮して、面接の内容の分析は構築主義を採用した(Roulston 2014)。つまり、面接調査という社会的状況に置かれた出来事のなかで、調査者と調査協力者という関係から構築される回答を分析した。その結果、「(他のフィリピン人グループに対する)A団体の優位性(表5の①)」というテーマが役員の回答から共通して登場した。さらに、面接では役員の日本での生活に話題が移行する場合もあり、個人の語りもデータに含まれた。この場合は、ナラティブという接近から、様々な出来事を配列したり、原因と結果の関係を付けたりする役員の主体的説明に焦点を当てた分析を行った(Elliot 2005; Roulston 2014)。その結果、「A団体に関わってから個人の成長(表5の②)」という別のテーマが役員のボランティア経験を捉える視点として登場した。

さらに、面接で得た「A団体の優位性」と「個人の成長」というテーマについて、A団体の活動の観察を行った。観察の対象は、A団体が主催するイベントだけでなく、SNSに投稿されるA団体のイメージ写真、動画、メッセージも含まれる。観察からは、「支援が必要なのは誰か」、「誰が支援をするべきか」、「どのように支援は与えられるべきか」(表5の③、④、⑤)という、支援についてのテーマが登場した。

また、面接で得た役員のボランティアの経験について、複数の視点から知見を得るために、A団体と共に仕事をしてきた関係者(介護士養成施設の職員、自治体が行う国際交流活動に現場で携わってきた職員、A団体を支援する日本人の友人、など)からの聞き取りも行った。よって、本稿の分析は複数の情報源に基づく。

1. A団体に入る前にボランティア活動をしたことがあるか。(Did you have any experience of volunteering before joining A GROUP?)
2. 以前、何かボランティアグループにいたことはあるか。(Were you a member of any volunteer club before?)
3. A団体を知ったのはいつ頃か。(When did you first get to know A GROUP?)
4. A団体の最初の印象は。(Do you remember your first impression of A GROUP?)
5. A団体はどんなグループか。(How would you describe A GROUP today?)
6. A団体に入ってから、ボランティアに対する考えは変わったか。(Is your view of volunteering the same or different after joining A GROUP?)
7. A団体での自分の役割は何か。(What do you think is your role in A GROUP?)
8. A団体のメンバーと支援者にとってA団体の良い所は。(How beneficial do you think A GROUP is for its members and supporters?)
9. 地域にとってA団体の良い所は。(How beneficial do you think A GROUP is for this region?)
10. フィリピンとフィリピン人にとってA団体の良い所は。(How beneficial do you

think A GROUP is for the Philippines and the people?)

11. ～さんにとってA団体の良い所は。(How beneficial is A GROUP for you?)
12. A団体の役員をされていて一番難しかったことは。(What was the most difficult challenge you had to deal with as an A GROUP member/officer?)
13. A団体の役員をされていて一番良かったことは。(What is the best experience as being an A GROUP member/officer?)
14. A団体と今後どんなプロジェクトをやりたいか。(If you could have your own project with A GROUP, what kind of project would you like to have?)

**表4 面接で準備した質問 筆者作成**

- ① (他のフィリピン人グループに対する) A団体の優位性
- ② A団体に関わってからの個人の成長
- ③ 支援が必要なのは誰か
- ④ 誰が支援をするべきか
- ⑤ どのように支援は与えられるべきか

**表5 面接と観察から登場したA団体の事例分析のテーマ 筆者作成**

#### 4. 「地域の団体」としてのA団体と役員のボランティア活動の意味付け

この節では、A団体を運営してきた役員のボランティア活動の意味を検討する。著者は地域のボランティア団体の情報を収集する過程でA団体の存在を知ったが、A団体の役員に直接出会ったのは当団体が自治体の外郭団体と協働して月2回開催するタガログ語相談の場である。タガログ語相談は地域に住むフィリピン人を主な対象としているが、A団体にコンタクトを取りたい外部の人間もA団体の相談員と話ができる場となっている。この節では、先ずA団体がボランティア団体として誕生した背景と、地域社会で行ってきたフィリピン人への支援活動の特徴を述べる。そして、それらの活動にA団体役員が付ける意味を検討する。

##### 4.1 地域社会とフィリピン人とをつなぐ団体

A団体の活動は特定のフィリピン人コミュニティに限定されず、自治体や外郭団体等の地域社会との協働によって展開されてきた。現在は520人以上の会員を持つA団体だが、A団体を設立した田中さんによると、1995年の阪神淡路大震災が起きた後、フィリピン領事館の関係者に連絡を取った田中さんがその際に助言を受けたのがA団体を10人で始めるきっかけとなったという。九州でも同じような災害が起きた場合を考えて、フィリピン人同士が助け合うことが出来るグループとしてA団体が立ち上げられた。その後、団体の目的(1. 困っているフィリピン人を助けること。2. お互いを支えること、3. 母国への援助活動。4. 在日フィリピン人の地域貢献と地域交流)が設定され、運営の中心メンバーとなる役員が選ばれた。さらに、役員を中心としたA団体の支部が地域の各地に置か

れ、遠隔地に暮らすフィリピン人にA団体の支援情報や交流情報が提供されてきた。また、その支援活動は役員を中心に話し合いを重ねながら、プロジェクトとしてこれまで実施されてきた。これらのプロジェクトには、定住するフィリピン人へのタガログ語相談、パスポート更新の支援、そして母国フィリピンでの災害復興支援や貧しい人への生活改善支援等が含まれる。また、クリスマス・パーティーやチャリティ・イベントなどの交流イベントも開催され、その参加者はフィリピン人に限定されたものではなく、日本の家族や友人にも開かれている。またA団体と協働して事業等を行う自治体や学校、その他の団体等の関係者も招待される。

特定のフィリピン人コミュニティに限らずに、地域社会と協力して活動するというA団体の特徴は、2015年から開始されたA団体のメンバーを介護職員として（再）就職されるプロジェクト（以降、「介護プロジェクト」）ではさらに展開を見せる。支援の対象はA団体のメンバーであるフィリピン人であるが、その支援の実施には地元のハローワークや介護士養成施設、就職先の社会福祉法人等との連携が欠かせない。さらに、2019年からはフィリピンに住むA団体メンバーの親せきがA団体から奨学金を受けて日本語を学び、介護や農業の分野で就職するプロジェクト（以降、「日本語プロジェクト」）が開始された。このプロジェクトでは上記の介護士養成施設や企業だけでなく、メンバーが運営するフィリピンでの人材派遣事業とも連携する機会を生んでいる。

これらの活動は、A団体のプロジェクトとして組織的に行われ、地域社会との連携から発展してきた。よって、A団体の特徴として、フィリピン出身者同士が作る「つながり」のネットワーク（鈴木 2009）だけでなく、地域に根ざしたボランティア団体という特徴がある。これは、日本のボランティア活動は行政とのつながりによって正統性を与えられ、地域内で連携する作業が「ボランティア」として認められてきたという国内の背景と関連する（桜井 2018; Haddad 2007）。つまり、A団体の活動は地域社会とつながること、具体的な事業を実現してきた。その結果、フィリピン人を支援するA団体はフィリピン人だけでなく、地域社会にとっても、特に、国際交流や福祉の分野でフィリピン人と地域社会とをつなぐ重要な存在となってきた。

さらにA団体の立ち上げは1990年代という、日本で「ボランティア」の新しい概念が登場した時期であった。A団体は1995年に開始されたが、この時期の「ボランティア」という言葉は、これまで日本で浸透していた自己犠牲的「奉仕活動」と対比される、「楽しさ」「自己実現」「自己成長」を強調する言葉として登場した（仁平 2011; 藤村 1998）。この主体的な側面を強調する「ボランティア」概念は、A団体が掲げる団体の目的や、後述する役員のボランティア経験と矛盾しない。言い換えれば、地域社会は、A団体のボランティア活動を介してフィリピン人とのコミュニケーションが効率的になり、彼らと交流し連携する可能性が登場する。そして、ボランティア活動は地域社会で認められ、自らの関心や目的を実現する手段をA団体のメンバーに与えてきたことが考えられる。以下では、A団体の運営の中心となる役員5人が説明するボランティア経験、特に、役員が認識するA団体の評価と役員の個人的な成長の語りを検討する。

## 4.2 役員が認識するA団体の「違い」

役員との面接では、地域社会でのA団体への評判とは別の評価に言及がなされた。先ず、A団体がどういうグループと思うか尋ねると、複数の役員から、他のフィリピン人のグループとは違う、という点が強調された。さらにA団体が持つ「違い」について尋ねると、「(他のグループがただ集まるだけであるのに対し) purpose (目的)を持っている」こと、「リーダーがちゃんとしている」こと、「family (家族)」などA団体が持つ組織的側面が共通して言及された。

役員が認識するA団体の「違い」は、他のフィリピン人グループとの対立を意味しない。A団体の役員は長年日本に居住してきたフィリピン人として、同国出身者との関係を大切にし、地域のフィリピン人が頼ることができる存在である。むしろ、これまで関わってきたフィリピン人同士の付き合いの中では体験できない、A団体での経験の質の違いが役員からの評価で強調される。例えば、役員の島本さんと本村さんはA団体が目的を持って活動していることを評価する。本村さんの言葉で言うと、A団体以外の集まりでは、「やっぱり考え方が違うの。やっぱりあの、例えば、meetingがあるとき、みんな行く。でも、例えば行くだけ。purposeとかね、なんかどうでもいいです。」

目的を持つことの重要性は、A団体を「family (家族)」と呼ぶ役員の認識とつながる。ここでは島本さんの経験に焦点を当てて、A団体が目的を持つことが役員にとってどのように重要なのかを検討する。日本に住んで30年以上になる島本さんは目的を持つA団体を以下のように経験した。

(住んでいる地域)では経験があったんですよ。でもその時、A団体じゃなくて、それは(地域の)コミュニティだけとか。その時、私の力だけでフィリピン料理をそのパーティ、パーティじゃなくてフェスティバルとか、そういう時はするんだけど。でもここは大きなグループで、初めてだった。(地域のコミュニティでは)話しても、そこまでのことは言っていなかったの。ただ、助けるのは一つがいい。目標が一つになったのは私は楽しかった。

役員が言う家族とは血縁でつながった集団ではなく、友人同士が集まるグループの事でもない。A団体は仲良しグループ以上の価値を持つ集団として役員に認識される。島本さんが語るA団体は、ただ集って楽しむだけのグループに参加する経験と対比され、仲良しグループ以上の価値を持つ集団として認識される。島本さんは日本で結婚し、日本語が上手くない外国人という地域社会でのポジションで子育てをする孤独を経験し、友人を持つことの大切さをよく理解している。しかし一方で、ただ集まるだけのグループでの経験を島本さんは以下のように批判的に語る。

これ(A団体)は普通のgroupのfriendshipじゃない。(中略)ただ毎日会ってる、それ、best friendじゃないよ。毎日会ってる、best friendじゃないですからね。私たちが会ってないんだから。目標はそれです。(中略)だから、bondingばかり、遊びばかり。それは、じゃない。I did that before. I did that. But some people did that, and I



*make it jokes.*でも、私舐められてきたから少し避けちゃった。

集まって楽しむだけのグループでは、「喧嘩ばかり」する人間関係の中で友人作りを行い、「ケガだらけ」の仕事に従事し、「すごく丁寧な言葉を使って」接してくるA団体に対し「私頭悪い」と自分を位置付けていたことが島本さんの経験として語られる。つまり、ただ集まるだけのグループの中では、(仕事や人間関係での)生活の質や、(自尊心などの)人としての性質に欠けるフィリピン人として自分が位置付けられる。対して、島本さんはA団体に対して「汚したくない」という気持ちを持ち、会長である田中さんを「友達として、リーダーとして、すごくいい方」とであると評価する。さらに、島本さんは現在の仕事から得る自分への誇りを以下のように報告する。(島本さんは前述したA団体の「介護プロジェクト」の2期生として資格を取得し、介護職員として働いている。)

夢じゃないけど、今までよりもいい仕事見つけたっていう感じ。結構自慢もできる。最初は旦那さんには、あんた介護難しいよって、日本語難しいよ、って言われて。(中略)だから日本では頑張ってるcare giverだなあと。

島本さんはA団体での経験を個人の成長と重ねて認識し、「全然違う、雰囲気。他のと比べたら」という評価をA団体に付ける。

島本さんの報告が示すように、A団体が他のフィリピン人グループと異なるという認識は、生活の質の向上、そして、(自信などの)人としての成長という役員の個人的な経験に裏付けられる。こうした経験は、目的を持たずにただ集まるだけのフィリピン人から、目的を持って活動するA団体のメンバーになるという移行過程として認識される。そこで、次項では役員が語るA団体に参加してからの個人的成長を検討し、役員にとってA団体の「違い」とはどのような意義があるのかをさらに探る。

#### 4.3 A団体の評価を裏付けるする役員の個人的成長の経験

他のフィリピン人グループより優れていると認識する役員のA団体への評価は、自身の個人的成長の経験に裏付けられる。役員との面接からは、認識される成長が2つの語りのパターンとして同定された。一つは、「(以前に比べて日常生活で)怒らなくなった」という言及が示すような、自分を律する能力の認識である。もう一つは、自分についての向上だけでなく、他人との関係の向上の認識である。

面接を行った役員は皆20年以上日本に住んでおり、以前はタレント・歌手として働いていたことが多い。現在は若いフィリピン人を雇って「お店」を経営する役員もいれば、「お店」で働くフィリピン人とのつながりを持ちつつ、地域社会で生活する役員もいる。「違い」を持つA団体の役員になる経験は、このようなフィリピン人コミュニティとの関係の中で経験される。ゆえに、A団体の役員の「怒らなくなった」という成長は、経済的地位や地域社会での社会的地位の上昇ではなく、フィリピン人コミュニティ内での立場の違いを自覚する成長として認識される。

例えば、役員の中島さんは「お店」を経営しているが、「お店」の業界でフィリピン人

同業者の年長者という立場で生き延びるには、容姿や若さといった表面的要素だけではなく、知恵や経験といった年長者に期待される価値を持ち合わせ、共有することが重要になる。中島さんはA団体でのボランティアの経験を以下のように説明する。

勉強。人と話すると、やっぱり、性格、関係もなんかね。We learn from the people. The character. うん、だからいろんな勉強ができる。(中略) 私、先に教会に呼んであげる。教会が一番、なんか呼びやすい。やっぱノリだから。それが一番最初。で、それから、A団体関係の話とかね、こんなあるよ〜って教えてあげる。(中略) フィリピン人でもね、性格、関係も色々あるから、付き合いするのも大変だよ。やっぱり、気を付けないと、ね。だからイベントとか、ほんと助けられる関係だったら教えてあげる。そんな話もちゃんとしてあげる。And I'm looking for more. あの何かな、う〜ん、これちょっと難しいな。それがホント勉強してる。People's behavior.

A団体での支援活動には、親しいフィリピン人だけではなく、様々なフィリピン人との出会いがある。面接を行った役員にとって、同国出身者への支援活動は自分への自信や感謝につながる前向きな経験を生む一方で、「はがゆいんですけど」と思うような他人からの反応を受ける経験もある。そうした前向きで、否定的にもなるボランティア活動は、役員にとって支援することのみを意味しない。上記の中島さんが述べるように、仕事上の成功、他人の特性、コミュニティ内の人間関係、日ごろの自分の振舞い、そして他人へ与える自分の影響力がいかに互いにに関わり、いかに複雑なものかに自覚的になる機会をボランティアの経験は与える。

ゆえに、A団体に参加してから「怒らなくなった」という複数の役員からの報告は、個人的な性格の変化の事だけではなく、役員が置かれた他人との関係の変化を反映するものとして捉えることが出来る。例えば、役員の本村さんがA団体会長の田中さんと信頼関係を築くことは、地域で本村さんが他のフィリピン人に対して前向きに働きかけることとつながる。中島さんと同じく「お店」を経営する本村さんは、以前は他人が「変なこと話したら」すぐ怒ってしまい、近隣に住むフィリピン人から「怒ると怖い」と言われたという。しかし、A団体の役員になってから、そのように認識される個人的性質を「コントロール」できるようになったという。以下は、本村さんと著者との会話である。

本村さん：あの、なにかA団体の役員になってからね。やっぱ自分の考えがやっぱり何か変わるんです。(中略) すっごい、いっぱいあって。それはもうコントロールできるようになった。自分のTemperがね。

著者：それはA団体の何がそう変えたんだろう。

本村さん：例えば私たちが問題あるとき、田中さんに相談する時、田中さんが（どうすればいいかを）説明する際、優しいの。

著者：田中さんの。

本村さん：のやり方。やっぱ。(中略) 田中さんと話したことあるやろ。すごい何か、優しいの。

著者：そうそう、優しい。

本村さん：やっぱり、見たら何か自分も学ぶ。真似する。で、自分のtemperもなんかすごいコントロールできる。怒らなくなる。

著者：ああ、じゃあ田中さんの影響が結構大きい。

本村さん：そうです。で、みんなも。みんなもほんと。すごいです。

本村さんがA団体で経験する優しさは、本村さんの強さとして地域での活動へと還元される。本村さんは仕事と家事とA団体の役員とを掛け持ちする比較的忙しい日常を送るが、A団体の交流イベントがあれば、自分の支部の地域に住むフィリピン人に呼びかけてダンス・チームを編成し、練習を重ねて、質の高いダンス・ステージを披露する。そこで練習をサボる人がいれば、本村さんの「いっぱい」ある日常の課題が増えるが、「怒らなくなった」という本村さんの語りでは、ボランティア活動が、そうした日々の課題よりもより大きな「purpose（目的）」を与えるものとして位置づけられる。本村さんは以下のよう

に説明する。

やっぱ、違うんです。やっぱ周りの人を一番に考えしてる。自分のことだけでなくて。うん。You have a concern for anybody. Not in yourself only. (中略) A団体に入ってから、やっぱみんなの目的、purposeあのhelp people.だからそれで強くなる。

役員が認識する強さとは、我慢強くなることではなく、周りの状況に流されて怒ってしまいう自分から、怒らないという自律を持ち、より大きな目的を持つ人間へと成長する強さである。この成長の重要な結果の一つとして、フィリピン人コミュニティでの役員の新しい位置付けがある。ビジネスにおいては中島さんや本村さんのように、若いフィリピン人に対してリーダーシップを取る知恵と経験を持つ立場が自覚される。

一方、日本人の配偶者との関係においても、個人の成長経験から再解釈が行われる。本村さんも、前述の島本さんも、A団体で役員をするようになってから、フィリピン、フィリピン人の支援活動をするのを配偶者が認めてくれるようになったという変化を報告する。本村さんの配偶者は本村さんがA団体の活動に参加しに行くことを、最初は渋っていたという。しかし、本村さんが役員になり、A団体の交流イベントに招待してから「旦那も一緒に一生懸命応援してくれる」ようになった。本村さんの配偶者は本村さんを応援するだけでなく、A団体の交流イベントでは賞品を寄付し、イベントの前席で誇らしげに本村さんのダンス・チームに声援を送るなど、現在は積極的にA団体に関る。

フィリピン人女性と日本人男性との国際結婚に関する議論では、夫婦の関係が不平等の関係にもとづいて成り立っていることが指摘されてきた (Shipper 2012)。しかし、長年日本に定住してきた役員は、仕事での自分の立場、年齢、新しく流入してくる若いフィリピン人など、時間の流れと共に経験する変化の中でフィリピン人としての自分の位置を再解釈することになる。特に、A団体と共に成長してきた経験は、日本人の配偶者との関係に前向きな変化を与える。島本さんは日本での結婚をA団体での自分の成長に位置づけて説明する。

日本人の奥さんやりながら、自分はフィリピン人のすること、うちの旦那さんは好きなんですよ。自分のふるさととは忘れてないけど、ね。これが、うちの旦那さん、だからsupportしてくれてるんですよ。家族なんですよ。うん。そう。私も生き生きで、楽しくてたまらない。(中略)それで、役員として、いま二十歳になったもんね。もう、そのぐらい。もう、19年のはたち。二十歳。二十年になる。

役員はA団体のボランティア活動を通して、大きな目的を共有し、自律したフィリピン人女性への移行を経験し、自身の位置を是まで日本で過ごしてきた時間の中で解釈する。さらに、報告された成長は、役員が置かれた関係の変化も反映する。フィリピン人ビジネスは中島さんを業界の中に維持し、フィリピン人コミュニティは本村さんを地域のリーダーにし、日本人の配偶者は島本さんを応援する。これらの例が示唆するのは、役員がA団体で経験する成長とは、自己の強さだけでなく、関わる他人への影響力にもなることだ。島本さんはA団体での成長を他人と共有することを次のように語る。

*Credibility, you know. I believe myself. I can help. I can support. I believe myself not because I am superior. I'm in the same. みんなと同じ。(中略)あの、私が出来からあなたも絶対できるよ、っていう。I want to share. それが伝えたい、私。いや、出来たんだから。あなたもできるよっていう、そう言う感じで。だって、人は出来る、すごい完璧にできない、あるから。だから勇気を、勇気を、勇気を与えるのが好きなんですよ。*

この節では役員が認識するA団体の「違い」と、それを裏付ける役員のA団体での成長の語りを検討した。次節では、役員が認識する「違い」がA団体のボランティア活動につながる具体例を検討し、A団体の道徳的関心が地域社会との連携へと顕著化する過程を考察する。

## 5 地域社会との連携の過程

A団体の会長である田中さんは、A団体がただ目的を持つだけでなく、その実現に向けて実際に行動することを強調する。そして目的の実現は、A団体のみで起こるのではなく、地域社会との協働によって可能になってきた。この節では前節で検討した役員のボランティア活動の意味が地域社会と連携した活動へとつながる過程を考察する。検討する連携の具体例は、タガログ語相談のミクロな状況での連携、役員の草の根レベルの技能実習生への支援活動、そしてフィリピンの若者の日本での就職を支援する「日本語プロジェクト」である。

### 5.1 タガログ語相談：ミクロなやり取りから具体化されるボランティアの連携

A団体は自治体の外郭団体と協働してタガログ語相談を行ってきた。地域の国際交流を担当する外郭団体にとって、定住外国人への行政サービスの提供は言葉の壁や、相手の個人的事情などから難しい所がある。そこで、同国出身者であるフィリピン人を支援するA



団体は重要なパートナーとなる。しかし、A団体と外郭団体との協働は、前者が後者のニーズに応えるという一方的なものではない。A団体はボランティアで外郭団体との協力を行っており、誰が誰にどのようにして支援を与えるべきかという決まりはない。むしろ、連携は支援に関係する当事者同士のやり取りの状況の中で具体化される。

著者は役員に会いにタガログ語相談に何度も足を運ぶようになり、外郭団体の職員とA団体の役員がそれぞれ違う立場から意見を述べながらも、相手の意見に耳を傾けることで、協働が可能になるという状況があることに気付く時があった。それは、支援の対象者や支援のやり方について、役員の視点が地域社会との連携に反映される時である。そして、地域社会にA団体やフィリピン人をどのように扱ってほしいのかという役員の関心が、公的な要求ではなく、地域と連携した活動を通して顕著化される時である。

例えば、フィリピン人の子供への教育支援について日本語ができるフィリピン人の支援を求める相談が教育委員会からタガログ語相談に寄せられた。相談に来たのは教育委員会の担当者ではなく、自治体を通して連絡を受けた外郭団体の職員である。職員は相談内容をA団体の役員に説明し、役員の反応に耳を傾けて、支援を要求する教育委員会との調整を担う。

しかし、外郭団体の職員とA団体役員との間ですぐに支援の話はまとまらなかった。その日当番であった島本さんは、職員から話を聞くと、先ずいくつかの確認をする。そして、教育委員会の支援の相談に対して、子供の親と実際に話をしてみないと支援できるかどうか分からないという趣旨を島本さんは何度も伝えることになる。教育委員会や外郭団体にとって、相談して支援を要請してるのは地域の学校であるという認識がある一方、A団体にとって支援の対象はフィリピン人であるからだ。職員が戸惑った様子で、相談しているのはフィリピン人の母親ではなく地域の中学校であることを伝えると、島村さんは母親が支援の相談のことを知っているのか職員に聞いた。島本さんは、まず母親がそういうことを望んでいるかどうか確認してから相談を受けたいのだった。

しばらく、お互いの意思疎通がかみ合わない時間が過ぎる。島本さんは、母親と実際に話をしてみないと支援できるかどうか分からないことを再度伝える。そこで職員は、教育委員会からの相談内容とは外れて、母親と島本さんが電話で話ができるよう調整をした。ここから、島本さんの支援活動が始まる。島本さんが電話で話すと、母親はA団体がカトリック教会とは関係のない団体だと分かり、相談を受けたいと申し出てきた。島村さんは支援を求める母親に対して、すぐに対応するのではなく、個人的に会うわけでもなく、先ず次回のA団体のタガログ語相談に来るように伝える。そして、後から、次回のタガログ語相談の当番も自分が引き受けることを島本さんは筆者に伝える。相談にやってくる母親の事を考えて、母親と最初に話をした自分の方が他の相談員よりも信頼してもらいやすいと思うとの事だった。

上記のエピソードが示すように、A団体と地域社会とが協働したフィリピン人への支援活動は制度化されたものではなく、当事者同士のミクロなやり取りの中で起こる偶発的な連携によって具体化される。特に島本さんの例は、支援を求める地域社会がA団体をどう扱うのか、支援の対象者であるフィリピン人がA団体をどのように見るのかはA団体の目的の実現に影響する、という役員の認識を示唆する。言い換えれば、ミクロな連携の状況



のなかで、役員の認識とその認識に基づく行動が相手の認識や行動に影響を与える機会が生まれている。

## 5.2 草の根の支援と「日本語プロジェクト」：誰がどのように支援を与えるべきか

A団体役員の地域社会への関与は、その支援と連携のあり方に反映される。しかし、支援活動は役員の認識のみを反映するのではなく、外国人が置かれた構造的状況も映し出す。A団体の関与が地域社会との草の根の連携から、日本で就職を希望するフィリピン人の若者を支援する「日本語プロジェクト」へと移行している状況はこのことを示唆する。特に、A団体が協働する関係者は地域社会だけではなくてきている。日本にやってくる若い世代のフィリピン人の存在は、A団体が築いてきた地域社会との関係や長年にわたって日本に定住してきた役員の立ち位置に新しい変化を与える。外国人労働者の日本での受け入れが技能実習生や外国人材という形で制度化される環境において、そうした若い世代のフィリピン人を支援することは、外部からの規制がA団体の支援のあり方に影響を与えるからだ。以下では、その事を示唆する著者のA団体の観察の事例を2つ紹介する。

草の根レベルの同国出身者への支援活動には、A団体メンバー同士の支え合いもある。例えば、イベントに差し入れを持ってきたり、SNSで相手に励ましの言葉を投稿したり、日本に來たばかりの若者を外出に誘ったりなどである。このような活動は、フィリピン人の結束だけでなく、相互の支援関係を作る。そのフィリピン人同士の支援関係の中で、若い世代のフィリピン人がA団体の草の根の活動と地域社会とをつなぐ存在として登場している。そのことを示唆するのが、役員の村田さんの経験である。村田さんは職場で偶然フィリピン出身の若者（「お兄ちゃんたち」）に会い、「お兄ちゃんたち」が近隣の漁業工場で働いており、工場から自由に外出することを制限されていることを知る。事情を知った村田さんは、もう一人の役員と共にA団体の名刺を持って工場の「社長」に会い行く。「お兄ちゃんたち」が外出できるように頼むためだ。「社長」はA団体のことを知らなかったが、村田さんたちの説明を聞いて、「お兄ちゃんたち」が村田さんが住む町に遊びに行くことを許可する。さらに、帰りが遅くなったら村田さんともう一人の役員の家に泊まることも許可される。その後、「お兄ちゃんたち」は自分達での外出が許されただけでなく、村田さんの支部を代表してA団体のチャリティ・イベントに参加するようになった。

村田さんがわざわざ工場に出向いて、初対面の日本人と技能実習生の待遇について交渉を行い、彼らの余暇を確保するのは、村田さんが地域社会でのフィリピン人の扱われ方に関心を持っているからだけではない。支援するフィリピンの若者は技能実習制度の下で日本に滞在し、彼らが置かれた経済的・社会的状況の帰結として、村田さんの「お兄ちゃんたち」への支援活動が登場した。

若い世代のフィリピン人の存在がA団体の支援活動のあり方に影響を与えている状況は2019年から実施されているA団体の「日本語プロジェクト」にも現れる。特に、外国人を労働者として受け入れる国と、国民を海外に労働者として送り出す国が規制する分野での支援活動であるために、A団体の活動は草の根のレベルから制度化された環境の下での活動へと、その関与の領域を移行させている。ここでは「日本語プロジェクト」がA団体からフィリピンの若者にどのように伝えられているかを検討し、地域社会とフィリピン人と

をつないできたA団体が、フィリピンの若者を通して定住の地域社会でボランティア活動が続ける意義を考察する。

A団体は、SNSを使って英語やタガログ語で団体の活動の案内を行い、メンバーにメッセージを発信してきた。その中で新しく登場したのが、介護職員または技能実習生として日本で働くA団体のメンバーやフィリピンから来日した若者が書いた、写真入りの感想文やメッセージの投稿である。メッセージには、職場で良い同僚に恵まれていること、専門的で責任ある仕事をしていることに誇りを持っていること等、充実した仕事の経験が書かれる。SNSを担当する役員によると、介護職のイメージは日本だけでなく、フィリピンでも良くないので、介護の分野で働く実際の経験を伝えることで、プロジェクトに関心を持ってほしい意図があるらしい。一方、メッセージは、これから日本で働く予定のフィリピンの若者に向けての内容もある。そこには、仕事に就くまでの粘り強さや努力、人との信頼関係の構築の重要性が書かれ、日本で働く上での職業上のアドバイスが発信される。

役員からの聞き取りでは、フィリピンにいる若者へ支援の対象を拡大することについて、日本で暮らしてきた自分たちが置かれた状況の説明があった。役員の家族は日本だけではなく、フィリピンにもいる。日本で数十年暮らし、子供が独立する年齢になり、老後を何処でどのようにして過ごすかへの関心が複数の役員から報告された。フィリピンにいる若い親戚が「日本語プロジェクト」を通して日本で暮らすようになれば、自分で度々フィリピンに帰らなくても、フィリピンと日本の両方の家族のそばで過ごすことが出来る。その意味で、「日本語プロジェクト」はフィリピンの若者を支援するだけのプロジェクトではない。「we are the beneficiaries (私たちも支援活動の受益者です)」という島本さんの言葉通り、これまで支援活動を行ってきた役員が他のフィリピン人に支援者になってもらうプロジェクトでもある。

フィリピン人が社会で公正な扱いを受け、生活改善を図る事に関心をもって支援活動をしてきたA団体は、自分達の要求を直接的に主張するのではなく、地域社会とのつながりを作るミクロな草の根の活動の中で、団体の目的を実現してきた。「日本語プロジェクト」は、これまでのA団体の支援活動の延長として位置づけられるが、外国の若者を日本の労働者として受け入れる制度に関与する活動でもある。制度化され、規制された分野での支援活動は、外国人労働者を受け入れる国の価値や規範を新参の外国人に教えることを請け負う団体にA団体が集約される危険をはらむ。「日本語プロジェクト」はA団体メンバーの高齢期への関心や、フィリピンから日本に来る若者への期待を反映する一方で、規制された分野での支援は定住先の地域社会との協働が持つ意義の両義性を示唆する。

## 6 結論

ボランティア活動は社会参加であり、政治参加とは一般的に区別される。しかし、A団体のボランティアは日本で長年暮らしてきた定住外国人が自分達が置かれた状況に関心持ち、同国人を支援するという点において、個人レベルの生活改善と、集団としての社会参加の特徴を持つ。A団体はフィリピン人同士が「家族」としてお互いを支援する団体であるが、単にフィリピン人が集まり、つながりを作る団体ではない。役員との面接では、「違い」を持つフィリピン人のグループという認識が報告され、その違いとは経済的地位

などの物質的側面ではなく、個人的な成長という非物質的な価値によって意味付けされていることが示唆される。さらに、経験に重点を置くそのボランティア活動は、個人化されたボランティア活動ではなく、「お互いに支える」というA団体の結束を生む活動である。本稿は、A団体の役員やメンバーの道徳的関心とその結束を象徴し、地域社会と連携したボランティア活動を通して顕著化されることに注目する。

ボランティア活動を行う外国人は、是まで市民的関与の主体として十分に考慮されてこなかった。特に外国人同士が結束する団体の活動に関しては、当事者のコミュニティ形成が注目され、その結束した関係が閉じた関係として批判的に議論されてきた。しかし、ボランティア活動を通して結束する外国人の団体には、外国人の社会的公正に関する関心があることがA団体の事例から示唆される。そして、当事者が持つ道徳的関心と目的は、直線的に主張されるのではなく、地域社会と協働したボランティア活動を通して実現されることをA団体の支援プロジェクトは示す。しかし一方で、そうした活動が、草の根の活動から規制された分野での活動へと移行してる状況は、支援の対象となるフィリピン人を労働者として受け入れる国の制度的環境が変容している状況も反映する。その結果、A団体というメンバー同士が支え合い、目的を共有する結束を持ったボランティア活動が、外国人の雇用を進める地域社会の期待に応えるという、複合的意義を持つ外国人の関与が登場している。

## 謝辞

本稿はA団体の協力により実施された調査に基づき執筆された。調査に協力していただいたA団体の役員の方々、及びA団体の関係者の方々に心よりお礼を申し上げます。

## 参考文献

- Adler, Richard P., and Judy Goggin. 2005. What Do We Mean By “Civic Engagement”? *Journal of Transformative Education* 3 (3):236-253.
- Berger, Ben. 2009. Political Theory, Political Science, and the End of Civic Engagement. *Perspectives on Politics* 7 (2):335-350.
- Ekman, Joakim, and Erik Amnå. 2012. Political participation and civic engagement: Towards a new typology. *Human Affairs* 22 (3):283-300.
- Elliot, Jane. 2005. *Using Narrative in Social Research: Qualitative and Quantitative Approaches*. London: Sage Publications.
- Haddad, Mary Alice. 2007. *Politics and Volunteering in Japan: A Global Perspective*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lamont, Michèle. 1992. *Money, Morals, and Manners : The Culture of the French and the American Upper-Middle Class*. Chicago: Chicago University Press.
- Martinson, Marty, and Meredith Minkler. 2006. Civic Engagement and Older Adults: A Critical Perspective. *The Gerontologist* 46 (3):318-324.
- Mercer, Claire. 2002. NGOs, civil society and democratization: a critical review of the

- literature. *Progress in Development Studies* 2 (1):5-22.
- Putnam, Robert D. 2000. *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*. New York: Simon & Schuster.
- Robinson, Candice C. 2019. (Re)theorizing civic engagement: Foundations for Black Americans civic engagement theory. *Sociology Compass* 13 (9):e12728.
- Roulston, Kathryn. 2014. Analysing Interviews. In *The SAGE Handbook of Qualitative Data Analysis*, edited by U. Flick. London: SAGE Publications Ltd.
- Shipper, Apichai W. 2012. Influence of the Weak: The Role of Foreigners, Activism, and NGO Networks in Democratizing Northeast Asia. *International Studies Quarterly* 56 (4):689-703.
- Skocpol, Theda. 1999. How Americans became civic. In *Civic Engagement in American Democracy*, edited by T. Skocpol and M. P. Fiorina. Washington D.C.: Brookings Institute.
- Torres, Sandra, and Rodrigo Serrat. 2019. Older migrants' civic participation: A topic in need of attention. *Journal of Aging Studies* 50:100790.
- Villegas, Celso M. 2019. The middle class as a culture structure: rethinking middle-class formation and democracy through the civil sphere. *American Journal of Cultural Sociology* 7 (2):135-173.
- 秋山 弘子. 2008. 自立の神話『サクセスフル・エイジング』を解剖する. 上野千鶴子ほか編著. ケアその思想と実践1 ケアという思想. 岩波書店. 181-194
- 稲葉 奈々子. 2016. 分野別研究動向(社会運動) - 失われた敵対性と「さまよう主体」のゆくえ -. *社会学評論* 67 (2):238-252.
- 桜井 政成. 2018. 災害ボランティアとは誰か. *政策科学* 26 (1):1-12.
- 高谷 幸. 2009. 脱国民化された対抗的公共圏の基盤 非正規滞在移住労働者支援労働組合の試みから. *社会学評論* 60 (1):124-140.
- 高畑 幸. 2010. 地域社会に見る多文化共生—名古屋市中区のフィリピン・コミュニティの試み. 加藤剛 編著. もっと知ろう!! 私たちの隣人, 世界思想社. 146-172.
- 仁平 典宏. 2003. 「ボランティア」とは誰か 参加に関する市民社会論的前提の再検討. *ソシオロジ* 48 (1):93-109,169.
- 仁平 典宏. 2011. 「ボランティア」の誕生と終焉: 名古屋大学出版会.
- 狭間 諒多朗. 2013. 地域社会における文化活動の担い手: 「地域社会と文化活動についての全国調査」を用いた回帰分析. *年報人間科学* 34 (1):1-22.
- 藤村 正之. 1998. 福祉国家・中流階層・福祉社会. *社会学評論* 49 (3):352-371.
- 三谷 はるよ. 2012. ボランティア・ケアラーは誰なのか?: ボランティア的行為における”K”パターンの再検証. *フォーラム現代社会学* 11:29-40.